

海外取材

Nikolaus Harnoncourt in Zurich and Salzburg

「モーツァルト・イヤー」の主役！

1~2月、ザルツブルク、チューリヒ歌劇場で大車輪の活躍！

1月から2月、ニコラウス・アーノンクールはザルツブルク、チューリヒ歌劇場で「モーツァルト・イヤー」の主役とも言えるほどの活動を展開した。1月27日のモーツァルトの250回目の誕生日には、ザルツブルクで「モーツァルト・イヤー」の開幕を告げるスピーチに渾身の指揮。そして2月に入るとすぐにチューリヒ歌劇場で《にせの女庭師》のフレミエに取り組んだ。その一方で、「モーツァルト・イヤー」以降の「部分的活動休止宣言」も飛び出すなど、このマエストロからは今月も目が離せない。



チューリヒ歌劇場《にせの女庭師》のリハーサルで指揮をするアーノンクール © Claudia M. Bischofberger

オペラの未来像!? チューリヒ歌劇場
《にせの女庭師》
“La Finta Giardiniera” in Zurich Opera

取材・文 中東生
写真 杉浦 大輔

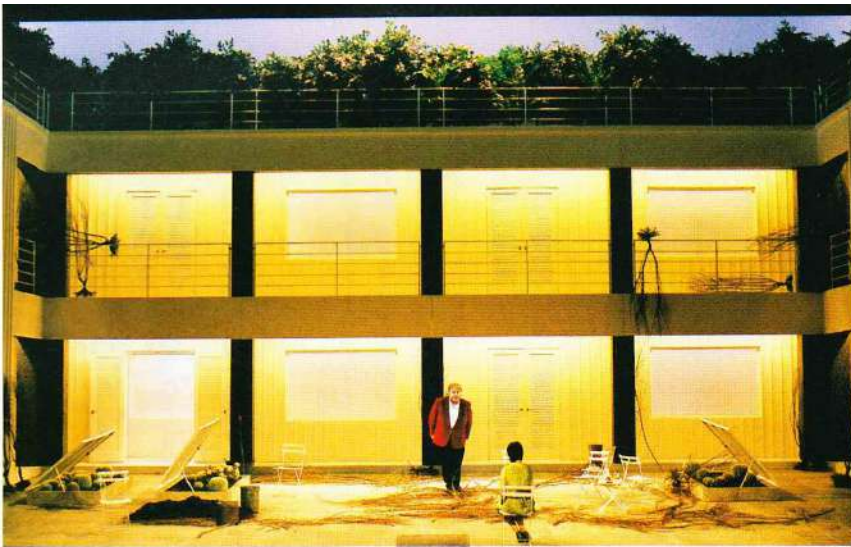
さすがアーノンクールである。モーツァルト生誕250周年記念にふさわしい高いレベルのプログラムであった。数日前に別のモーツァルト・オペラを当劇場で観て、がっかりしたばかりだったので、喜びもひとしおだ。

《にせの女庭師》は演奏される機会が非常に少ないオペラのせい、この役を経験済みの歌手は、2枚目半になりきった演技と、それを下品にしないだけの美しい歌い回しで自然な存在感のあったベルフィオーレ伯爵のクリストフ・シュトロールと、無理に声を押しつけて男声に真似るような部分がまったくなく、耳に心地よい声の際立った騎士ラミール役のルクサンドラ・ドノゼの2人だけ。しかし他の5人も、役デビューとは思えない演技、歌唱であったのは、演出のトビアス・モレッティも貢献していると思われる。テレビドラマで有名な俳優だが舞台もこな

し、2001年にブレゲンツで演出家デビューした。去年の1月、アーノンクール指揮による演奏会形式の《ツァイデ》ツアーでは語り手をこなしていた。ウィーン音楽・演劇大学では作曲も専攻していたという彼の演出は、まるで演劇を観ているかのように緻密に音楽に練り込まれ、オペラの未来像を感じた。

そしてアーノンクールの音楽は、序曲から確信と自由さに満ちあふれていた。アクセントも際立たせ、「モーツァルトでここまでやってもいいの？」と驚かせ、楽しませてくれた。歌手たちもなんと上手にその意向に沿っていたことだろう。彼と歌うことは声にいいようで、例えばアルミンダ役のイザベル・レイは彼と歌うと必ず声がピタッとはまり、魅力的な舞台姿と相まって、彼女の当たり役になる。ナルド役のオリヴァー・ヴィトマーも、無理なく声が響き、アンサンブルの通奏低音役もしっかりこなしていた。そして、サンドリーナ役のエヴァ・メイは、アーノンクールにすべて委ねているかのようだ。未成熟な音色も数カ所聴かれた

る。そしてアーノンクールの音楽は、序曲から確信と自由さに満ちあふれていた。アクセントも際立たせ、「モーツァルトでここまでやってもいいの？」と驚かせ、楽しませてくれた。歌手たちもなんと上手にその意向に沿っていたことだろう。彼と歌うことは声にいいようで、例えばアルミンダ役のイザベル・レイは彼と歌うと必ず声がピタッとはまり、魅力的な舞台姿と相まって、彼女の当たり役になる。ナルド役のオリヴァー・ヴィトマーも、無理なく声が響き、アンサンブルの通奏低音役もしっかりこなしていた。そして、サンドリーナ役のエヴァ・メイは、アーノンクールにすべて委ねているかのようだ。未成熟な音色も数カ所聴かれた

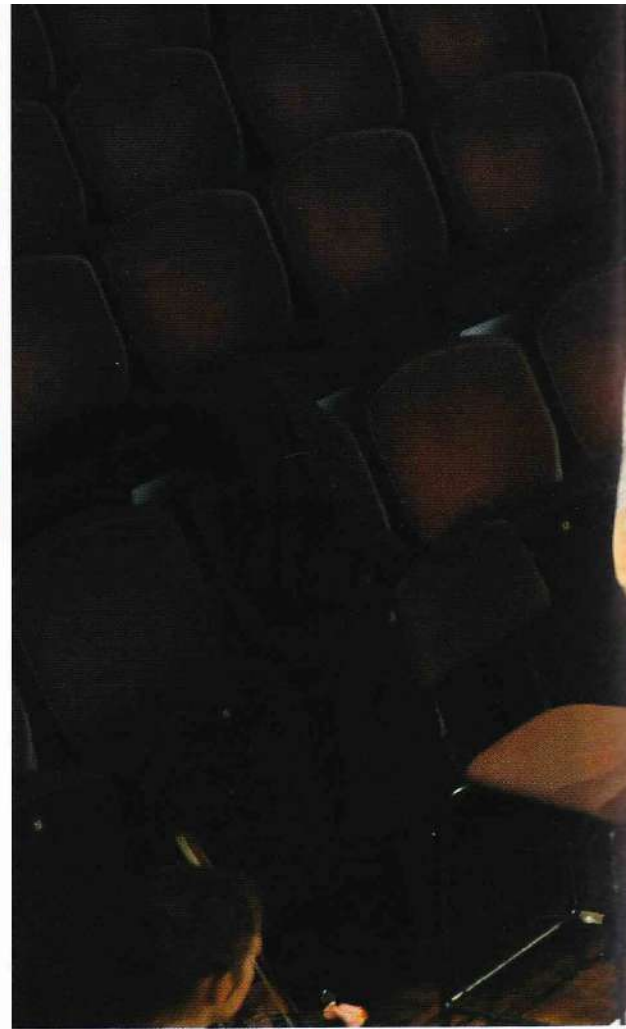


チューリヒ歌劇場での《にせの女庭師》のステージから(下も) ©Suzanne Schwiertz



©Suzanne Schwiertz

が、そういう部分を無理にカバーするよりも自然に任せ、その分声楽的テクニックに集中するといった声の使い方が、前述の《ツァイーデ》の題名役の時にも聴かれた。「このオペラで、モーツァルトのオペラはすべてレパートリーになると、昨年インタヴューした時に目を輝かせていたので、これからより成熟していくのだろう。その他ドン・アンキーゼのルドルフ・シャツシング、セルペッタ役のユリア・クライターもアーノンクールとの共演が多く、息の合った好演だった。



1~2月、ザルツブルク、チューリヒを中心に大活躍したアーノンクール。今後もベルリン・フィルへの客演など、快進撃が続く ©Claudia M.Bischobferger